

1. 緒言

筆者は前報¹⁾で、古事記の創世編は、縄文時代末に倭人が江南から九州に渡ってきて邪馬台国を作り、倭国の大乱を経て倭国の盟主になるまでの歴史を神話化したものであることを示した。この論文では、創世編に続く高天原神話、出雲神話および国譲りの神話に隠された史実を明らかにする。

2. 高天原神話

2-1 高天原と葦原中国

筆者は前報で、天照大御神は卑弥呼であり、須佐之男命は狗奴国王の卑弥弓呼であることを示した。従って、邪馬台国の都が高天原であると考えられる。福岡県朝倉市甘木は、昔から邪馬台国の有力な候補地である。筆者も、文献学的証拠、考古学的証拠、地理学的証拠、および言語学的証拠により、邪馬台国の都は甘木にあったことを示した²⁾⁻³⁾。甘木の中心部を筑後川の支流の小石原川（夜須川）が流れていて、この川の流域に高田と馬田（マタ）の地名が隣接して存在する。安本は、高天原の「たかま」は「高田」と「馬田」であり、夜須川の河原が『天の安河原』であると考えた⁴⁾。また、安本は、甘木を中心とした地名が大和郷のまわりの地名と一致すること、甘木に隣接する夜須町（郡筑前町）の大己貴神社は、以前は大神神社と呼ばれ、現在も鳥居の扁額には『大神大明神』とあること、桜井市の大神神社の背後に三輪山があると同様に、この神社の背後に三輪山（現目配山）があることから、甘木にあった邪馬台国が東遷して大和政権を開いたとする説（邪馬台国東遷説）を唱えている。

甘木の地名は、920年に建造された甘木山（かんぼくさん）安長寺に由来し、この寺を創建したのは甘木遠江守安長であると云われる。しかし、福岡県の人名に甘木姓は見当たらないので、甘木遠江守安長が実在した人物であるか疑わしい。甘木遠江守安長が創建したとの説は後付けであって、この地が『アマキ』と呼ばれていたのが甘木山安長寺と名付けられた可能性が高い。中国では王宮を城と呼んだ。北京の天安門は明と清の王宮である紫禁城（故宮）の第一門である。日本語では城を「キ」とも読み、福岡県太宰府市・大野城市・春日市にまたがる古代の水城（ミズキ）が有名である。卑弥呼（天照大御神）の王宮は『天城（アマキ）』と呼ばれ、王宮があった地域が「アマキ」と呼ばれるようになり、後に甘木の文字が当てられたものと考えられる。

弥生時代の九州は、主に倭人族と倭族が居住する筑紫、主に倭族が居住する豊、主に倭人族、倭族および縄文人系が居住する肥、主に縄文人系が共住する熊曾国に分かれていた。倭国の大乱に勝利した邪馬台国は筑紫と肥を統一し、さらに九州東北部を侵略しようとした。これに対して、宇佐の狗奴国が筑豊地方の把利国、宗像の烏奴国、および行橋の支惟国を統一して、邪馬台国と対峙したと考えられる³⁾。伊邪那美神の神生みの神話と、伊邪那岐神が

禊ぎをした時に神が生まれたとする神話は、この政治体制を神話化したものである¹⁾。邪馬台国の都があった甘木と筑豊地方は三郡山地で隔てられているが、この筑豊地方が葦原中国であったと考えられる^{1),3)}。

2-2 天照大御神と須佐之男命

神話では、須佐之男命は伊邪那岐命による『海の上を治めよ』との命令に従わず、泣き叫んでばかりであった。その理由を尋ねると、「亡き母の居る『根の国』へ行きたいのです」と答えたので、伊邪那岐命は怒り「それなら出て行け」と言って追放したとされる。伊邪那岐命は倭人集団を神格化したものであって実在する人格ではないので、伊邪那岐命が「出て行け」と言うことはない。この神話は、邪馬台国と狗奴国の戦いをモデルにして創作されたものと考えられる。

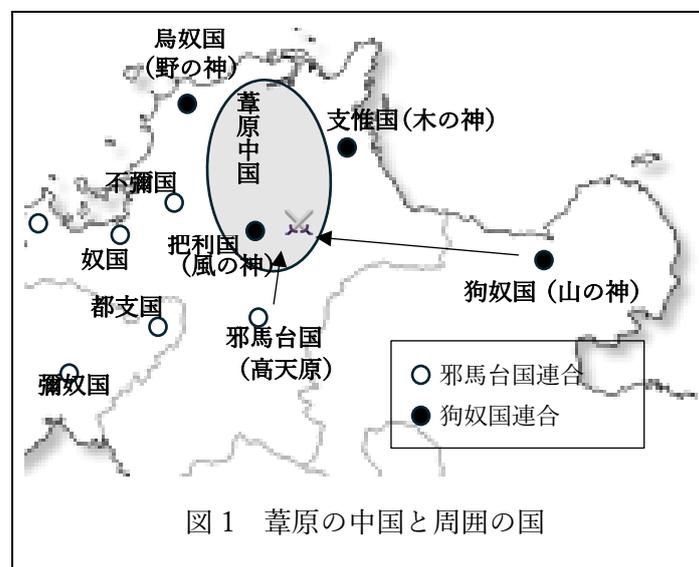


図1 葦原の中国と周囲の国

239年、卑弥呼は魏に使いを遣わして、魏の皇帝から親魏倭王の称号を賜った。魏の後ろ盾を得た邪馬台国は三郡山地を越えて倭族が居住する筑豊地方(葦原中国)の把利国を攻撃し始め、狗奴国は葦原中国を護るために出兵したと考えられる(図1)。これが、大国主神の国譲りで終わる長い戦争の始まりである。魏志倭人伝によれば、卑弥呼は243年に魏に使いを送って援軍を要請し、魏の皇帝はこれに応じて、245年に帯方郡の太守の手を通して難升米に詔書と黄色い垂れ旗を渡そうとした。黄色い垂れ旗は、謂わば、錦の御旗のようなものであろう。このことは、邪馬台国は苦戦していたことを示唆する。ところが、朝鮮の反乱にあって太守が戦死したため、詔勅と垂れ旗は帯方郡に留め置かれたままになった。この間に戦況は悪化した。247年に帯方郡の太守大傾が着任すると、卑弥呼は太守に使いを送って窮状を訴えた。大傾は直ちに国境守備隊の張政らに詔書と黄色い垂れ旗を持たせて倭国に派遣した。しかし、張政らが倭国に到着した時には狗奴国は邪馬台国の都を攻撃し、卑弥呼は既に死去していた。張政は檄を作って邪馬台国を励まし、邪馬台国は男王を立てたが国

は治まらず、殺し合いをした。卑弥呼の縁続きの台与を王に立てると国は治まったので、張政らは帰国した。これが魏志倭人伝に記された倭国の歴史である。

古事記には、「伊邪那岐命に追放された須佐之男命が高天原に登った時、山や川が悉く鳴り騒ぎ、国土が振動したので、天照大御神は須佐之男命が領土を奪いにきたと思い、戦争の準備を整えて須佐之男命を待った」と書かれていて、これは狗奴国が邪馬台国に攻め入ったことを基にして創られた説話であると考えられる。ところが、須佐之男命は根の国に向かう事情を説明にきただけで謀反の心を抱いてはいないとし、天照大御神の疑いを解くために宇気比（うけひ＝日本書紀では誓約）をすることを提案する。「うけひ」は古代日本で行われた占いであり、ある事柄について、「そうならばこうなる、そうでないならば、こうなる」とあらかじめ宣言を行い、そのどちらが起こるかによって、吉凶、正邪、成否などを判断することであると考えられている。天照大御神と須佐之男命の宇気比は子供を産み比べすることであった。まず、天照大御神が須佐之男命の持っている十拳劍（トツカノツルギ）を3つに折り、かみ砕いて吹き出した霧から三柱の女神（宗像三女神）が生まれた。次に、須佐之男命が天照大御神の左の角髪（ミズラ）に撒いている玉緒、右の角髪に撒いている玉緒、御蔓に巻いている玉緒、左手に巻いている玉緒、右手に巻いている玉緒の順に受け取り、かみ砕いて吹き出した各々の霧から五柱の男神が生まれた。宇気比の結果は、須佐之男命が生んだ子はやさしい女の子であったから潔白である証拠で、須佐之男命の勝であった。このように、余りにも荒唐無稽な内容であるために、この神話を史実と結びつけることは検討されてこなかった。

宇気比は、日本書紀では誓約であり、これを「うけひ」と読ませている。しかし、誓約とは「固く誓う」の意味であるので、占いが誓約であるとするのはおかしいことである。そこで、宇気比（誓約）の用例を探ると、邇邇芸命（ニニギノミコト）が木花之佐久夜毘売（コノハナノサクヤビメ）を見初めて妻にする場面で宇気比が用いられている。大山津見神は邇邇芸命に石長比売（イワナガヒメ）と木花之佐久夜毘売の姉妹を差し出したが、石長比売は醜かったので、邇邇芸命は木花之佐久夜毘売のみを妻にした。この時、大山津見神は、「娘2人を差し出したのは、石長比売を側に置けば、天つ神の命は石の如くにいつまでも変わらないものになるであろう、木花之佐久夜毘売を側におけば、木の花のように栄えられるであろうと宇気比して奉ったのだ。石長比売を返し、木花之佐久夜毘売を留め置かれたからには、天つ神の御子の命も、木の花のように儂いものとなるであろう。」と言っている。この場合の「宇気比」は占いとは少し違っていて、むしろ「誓い」であると考えられる。また、垂仁天皇が本牟智別御子（ホムチワケノミコト）に出雲大社を参拝させる時に同行する人物を決める際に、天皇が曙立王（アケタツノミコ）に命じて「大国主神を拜むことで、本当に祟りを払う効果があるのならば、この鷺巣池の樹に住む鷺よ!宇気比、落ちろ!」と言わせたら鷺が地面に落ちて死に、「宇気比、生きる!」と言うと鷺が生き返ったとの説話がある。この場合の「宇気比」も占いではなく、「誓い」に近い。

現代日本人は忘れてしまっているが、漢字は表意文字であって、「宇」、「気」、「比」には

各々意味がある。漢字／漢和／語源辞典によれば、「宇」は「(何事かを) 成し遂げようとする心の動き」、「気」は「何かをしようとする、また何かしたいと思う心の動き」、「比」は「仲間に加わる」の意味であるので、「宇気比」は「仲間と何事か成し遂げようとする」と誓うの意味である。つまり、「うけい」は占いであるが、宇気比は占いではなく誓約（セイヤク）であると考えべきである。このことに気づけば、高天原神話の意味するところが見えてくる。記紀の編者は、邪馬台国と狗奴国が戦争をしたことと、戦争の後に誓約（セイヤク）をしたことを基にして、この説話を創作したものと考えられる。この説話から「うけい」を取り除くと、天照大御神が須佐之男命の持っている十拳剣を3つに折ったのみであるが、須佐之男命は天照大御神の左の角髪に撒いている玉緒、右の角髪に撒いている玉緒、御蔓に巻いている玉緒、左手に巻いている玉緒、右手に巻いている玉緒をかみ砕いた。このことは、須佐之男命（卑弥弓呼）は天照大御神（卑弥呼）に勝った、即ち狗奴国が邪馬台国に勝ったことを示唆する。だからこそ、須佐之男命は「天照大御神が造った田の畦を壊したり、溝を埋めたりした」、「天照大御神が食事をする宮殿に尿を撒き散らした」、「天照大御神が機織り場で神様の御衣服を織らせている時に、機織り場の屋根に穴を開けて斑駒の皮を剥いて墜とし入れたので、機織り女が驚いて機織りに使う板で陰を突いて死んでしまった」などの乱暴狼藉を働いたのである。また、日本語では「隠れる」は「死」を意味するから、「天照大御神は天岩戸に隠れた」とは卑弥呼が死んで葬られたことを意味する。須佐之男命（卑弥弓呼）は天照大御神（卑弥呼）を殺して高天原（邪馬台国の都）を占領したのである。

恐らく、邪馬台国の王族や指導者たちは伊都国に逃れたものと推察される。そこに、帯方郡から派遣された張政らの国境警備隊が到着した。張政は難升米に詔書と黄色い垂れ旗を渡し、檄を作って告諭した。張政らの支援を得て、邪馬台国軍は逆襲し、終には狗奴国を滅ぼしたと推察される。このことをモデルとして創られたのが、思兼神の発案で天照大御神を天岩戸から引き出すために祭りをする説話であろう。「思」には「決定する」、「兼」には「将来のことまで考える」の意味があるから、「思兼神」は「作戦を練る人」に意味である。思兼神は常世思兼神とも呼ばれ、邇邇芸命の天孫降臨の折に高天原を立ち去っている。張政も、世が治まると帰国したから、思兼神は張政であると考えられる。また、常世の国の『長鳴鳥』とは、張政らの国境警備隊のことであるに違いない。

この戦いは 248 年頃に終わったと推察される。戦いの後には和平交渉が行われるのが常である。筆者は、戦後交渉は天照大御神の子の天忍穗耳命（アメノオシホミミコト）と、須佐之男命の子の五十猛命（イソタケルノミコト）によって行われたと推察する。古事記に、須佐之男命が沢山の品物を差し出させて追放されたと書かれている。この『沢山の品物』は須佐之男命の領土であると考えられる。つまり、天忍穗耳命は須佐之男命が治めていた九州東北部を譲るように求めたのである。これに対し、五十猛命は、その代償として狗奴国王家を残すことを求めたと推察される。話し合いの結果、天忍穗耳命と五十猛命は、天孫を王とし、須佐之男命（卑弥弓呼）の後裔氏族の娘を王妃とすることとする国を作ることを合意し、誓約したと考えられる。このことは「須佐之男命」という名前に示されていて、「須」は「願

う・望む]、「佐」は「わきで支え助ける」の意味であるから、この名前は「天孫をわきで支え助けることを望んだ人」の意味である。

記紀は天皇が天孫の万世一系であることを示す書であることは周知の事実である。しかし、皇后も須佐之男命の子孫による万世一系でなければならなかったと考えられる。このことは、皇后の出身氏族を詳細に調べることによって証明できる。日向神話に登場する天孫は男子のみであり、天孫と結婚する女性は全て須佐之男命の子孫である。このことは、次に投稿予定の論文で証明する。飛鳥時代や奈良時代に皇后(天皇の母)となれる女性は皇族以外には、春日、葛城、蘇我などの有力の氏族の娘に限られていたが⁵⁾、これらの氏族は皇別であるとともに須佐之男命の血を引く氏族であると考えられる。平安時代に天皇との縁戚関係を築いて摂関政治を行った藤原氏も須佐之男命の血を引く氏族である。日本に天津神(高天原から天降った神々)と国津神(葦原の中国に現れた神々)が存在するのは、邪馬台国と狗奴国が手を結んだからに他ならない。

3. 出雲神話

3-1 八俣遠呂智

古事記を読むと、須佐之男命は高天原を追放されたので出雲に行ったと誤解するが、この時、須佐之男命は殺されて根の国に行ったのであって、出雲に行ったのではない。根の国は想像上の死者の霊の国で、出雲にあると思われていたのである。倭国の大乱は190年頃に終わり、その頃から邪馬台国と狗奴国の対立が始まったと考えられる。従って、伊邪那岐神が「出ていけ」と言ったのは、この頃であると思われる。そして、須佐之男命(卑弥弓呼)が高天原(邪馬台国の都)に登ったのは247年である。この間、須佐之男命が何もしなかったのではなく、邪馬台国との戦争の準備をしていたと考えられる。恐らく200年頃、須佐之男命はその準備のために出雲に行ったと推察される。

須佐之男命が降り立った鳥髪は、島根県奥出雲町鳥上のことであると考えられている。肥の川は現在の斐伊川で、昔は簸川であった。「簸る」は、「箕でふるって屑をおとすこと」という意味である。斐伊川の上流の船通山(鳥上山)付近には風化した花崗岩が露出しており、これを砕いて砂鉄を採取していた。砂鉄をふるい分けていたので、『簸川』と呼ばれるようになったと考えられる。従来、日本における製鉄は5世紀に始まったと考えられていた。製鉄には高温が必要であり、弥生時代には製鉄に必要な高温を作り出す技術はなかったとされてきたからである。しかし、近年、弥生時代の製鉄の跡が次々に見つかっていて、壱岐のカラカミ遺跡が特に有名である。今では冶金学研究の立場から、弥生時代後期段階には地域限定的に鉄生産が行われたと考えられている⁶⁾。最近の知見では、比較的低温でも製鉄が可能で、褐鉄鉱を用いれば七輪でも製鉄が可能であると言われる。また、チタンが極めて少ない砂鉄を用いれば青銅器製造に必要な温度で製鉄することができ、島根県の斐伊川流域で、この『チタン分が極めて少ない砂鉄』が採れると言われる。島根県では弥生時代のタタラ跡は見つかっていないが、隣の広島県では小丸遺跡、京野遺跡等で、弥生時代のタタラ遺跡が

見つかっている。また、須佐之男命が鳥髪で妻にした櫛名田比売（クシナダヒメ）の両親は足名椎（アシナズチ）と手名椎（テナズチ）であるが、『椎』は『物を叩く道具。槌』の意味である。従って、足名椎命と手名椎命はタタラ製鉄に関わる人物であったと考えられる。

斐伊川は中国山地に至る広範な山間部を流れるが、雲南省の加茂町から大東町、木次町、三刀屋町にかけて、斐伊川と赤川、三刀屋川の合流地点を中心に平野部が広がっている。吉田町の「菅谷たたら山内」は、全国で唯一現存するたたら製鉄の施設と、そこで働く人たちの居住区が一体となった集落である。古代のたたら製鉄は露天で自然の通風を利用して鉄鉄を得るという形で行われ、これを野たたらという。島根県では船通山の周辺には多くの野たたら跡があったといわれるので、当時は夜にはたたらの真っ赤な火が闇に浮かんでいたと思われる。この山の周辺には斐伊川の支流の谷川が幾つも流れている。従って、古事記に、「その目は丹波酸漿（タンバホオズキ）のように真っ赤で、身体一つに頭が八つ、尾が八つある。その身体には苔だの檜・杉の類が生え、その長さは谷八つ峰八つをわたっている。その腹には常に血が滲んでいる。」と表現される八俣遠呂智は、船通山麓における野たたらの夜景を描写したものと考えられる。八俣遠呂智は8つの頭と8つの尾を持ち、谷8つ峰8つの長さであり、手長椎と足長椎の子も8人である。この8という数字は、火迦具土神の神話でも使われ、伊邪那岐命は黄泉の国で8雷神に追いかけられた。この8雷神は、倭国の大乱で戦った8国の国王を神格化したものであると考えられた^{1),2)}。また、伊邪那美神が火迦具土神を産んだために陰を火傷して、その嘔吐物、尿および糞から神が生まれ、死んだ後は出雲と伯耆の境の比婆山に葬られたとの神話は、九州内の歴史であった古事記に出雲が関わったことを示すと考えられた¹⁾。これらのことから、八俣遠呂智の神話は火之迦具土神の神話の続きであり、倭国の大乱が原因となって卑弥弓呼（須佐之男命）は出雲に来ることになったと考えられる。「遠」には「距離の隔たりが大きい、関係が深くない、血の繋がりが弱い」、「呂」には「背骨」の意味があるから、八俣遠呂智は「八つに分かれた山に須佐之男命（他所から来た人）の智略がある」の意味であると考えられる。

当時は、鉄製武器の多さが、戦争の勝敗を決める最大の要因であったと考えられる。倭の諸国は朝鮮半島から鉄を輸入していたが、冊封体制の下では、原則として朝貢していない国は交易を行うことができなかった。後漢の時代は奴国が朝貢国であり、倭国の大乱の後は邪馬台国が公孫政権に朝貢して玄界灘を支配していた。このため、狗奴国は朝鮮との交易を行うことが困難であったに違いない。古事記に、須佐之男命が大気津比売神（大宜都比売神）に助けを求める説話がある。「気」には「あれこれ考える心の動き」の意味があるから、「大気津比売神」は「港を管理する偉い人」の意味である。また、「宜」には「地位・身分が高い」、「都」には「諸侯が住む城がある地」の意味があるから、「大宜都比売神」は「伊都国にいる地位の高い人」の意味である。これらのことは、大気都比売神（大宜都比売神）は一大率であることを示唆する。この神は鼻や口や尻から食べ物を出し、調理して差し出したので、須佐之男命はこの神を殺したとされる。この説話は、須佐之男命が朝鮮半島から鉄を入手しようとしたが、一大率はそれを認めなかったことを基にして創られたと考えられる。

また、日本書紀の一書に、高天原を追放された須佐之男命は五十猛命と共に新羅に渡ったが、「私はこの土地に居たくない」と言って出雲の鳥髪に辿り着いたとの説話がある。この説話も、卑弥弓呼（須佐之男命）は朝鮮半島から鉄を輸入することが出来なかったため、出雲の鉄に目をむけたことを示唆している。須佐之男命は鉄を入手するために、出雲を征服した。この時に、狗奴国から出雲に人の移動があったと考えられる。

このことには、考古学上の裏付けがある。1984年～1985年、出雲市の荒神谷遺跡が発掘調査され、中細形銅剣 358 本、銅鐸 6 個、および銅矛 16 本（中広形 14 本、中細形 2 本）が出土した。広形銅矛には九州産の青銅器に見られる綾杉状のとき分けがあることから、16 本ともに北部九州で製作されたものとみられている。銅鐸は最古のⅠ式（菱環紐式）1 個とⅡ式（外縁紐付式）である。これらは九州産の可能性が高いと考えられている。つまり、荒神谷遺跡で出土した銅鐸と銅矛は甕棺時代に作られたものである。八束郡鹿島町大字佐陀本郷の志谷奥遺跡でも銅剣 6 本と銅鐸 2 個が出土したが、これらは邪馬台国の時代に作られたものである⁷⁾。

1996 年には雲南市加茂岩倉で銅鐸 39 個が出土した。安本美典⁷⁾によれば、銅に含まれる鉛の同位体の分析によって、荒神谷遺跡出土の銅剣と加茂岩倉遺跡出土の銅鐸は、邪馬台国の時代（180～260 年）に北九州を通して得た北中国原産の銅を主成分として、一時代前の甕棺時代の細形銅剣などに用いられる朝鮮原産の銅を加えて制作されたものであることが分かった。つまり、出雲には九州から持ち込まれた青銅器（甕棺時代に作られたもの）と、邪馬台国時代に九州産の青銅に朝鮮原産の銅を加えて作られた青銅器が存在する。中細形銅剣は大分県で出土するが、福岡県では出土しない。これらのことは、豊前から出雲へ人の移動があったことを示唆する。卑弥弓呼（須佐之男命）が出雲を征服した目的は、出雲勢力を滅ぼすことではなく、鉄を入手することが目的であったから、銅剣銅鐸祭祀と銅矛祭祀が共存することになったと考えられる。

卑弥弓呼（須佐之男命）は出雲で得た鉄を使って武器を作り、邪馬台国と戦う軍備を整えたと考えられる。240 年頃に戦争が勃発した。狗奴国は優勢であり、247 年には高天原（邪馬台国の都）に攻め込んだ。ここから高天原神話が始まり、「須佐之男命は、それでは天照大御神に事情を申しあげてから、根国に参りましょうと言って、天に上っていった。この時、山や川がことごとく鳴動し、国土が震撼した。」と続く。須佐之男命（卑弥弓呼）は高天原（高天原）を占領し、天照大御神（卑弥呼）を至らしめた。しかし、狗奴国は帯方郡の支援を得た邪馬台国の反撃を許し、248 年頃、狗奴国は滅亡した。

3-2 大国主神

須佐之男命の後を継いだのは大国主神（大穴牟遲神）である。日本書紀によれば、大己貴命（オオアナムチノミコト＝古事記では大穴牟遲神）は須佐之男命と奇稲田姫（クシナダヒメ＝古事記では櫛名田比売）の子である。一方、古事記では大穴牟遲神は須佐之男命の六世孫でありながら、須佐之男命の娘の須勢理毘売命（スセリビメノミコト）と結婚したので、

義理の息子でもある。しかし、一世の娘と六世孫が結婚することはない。そもそも、須勢理毘売命は根の国に住むのであるから、実在の人物とは考えられない。実際、「須」は「用いる」、「勢」は「自然のなりゆき・状態・様子」、「理」は「不変の法則」であるから、「須勢理」は「不変の法則を用いた状態」の意味であり、転じて死を意味すると考えられる。つまり、須勢理比売命はこの世の人ではなかったのである。従って、古事記の大国主神（大穴牟遲神）に関わる系譜は修正されたものであることは明らかである。

須佐之男命は奥出雲で生産した鉄を入手して狗奴国に運ぶシステムを構築すると、直ぐに狗奴国に引き返して統治に当たったと考えられる。須佐之男命は奥出雲に至るまでの間に各地の女性を娶って子どもを生んだようで、神話には八十神（兄神たち）が登場する。従って、これからの説話は、須佐之男命が去り、子どもたちが大人になった頃、恐らく220年頃からの出雲での出来事である。大穴牟遲神は、その八十神に2度襲われ、八十神に追われて逃げ込んだ根の国で、3度危険な目に逢っている。その回数は5回で、大穴牟遲神の祖神も5柱（須佐之男命の子、孫、3世孫、4世孫、および5世孫）である。従って、これらの5柱は、実は八十神であると考えられる。「牟」は「むさぼる」、「遲」は「願う・望む」の意味であるので、大穴牟遲は「世の中に穴があくことを熱望した人」の意味である。従って、大穴牟遲神は異母兄たち（八十神）を倒して出雲の王になったと推察される。

神話では、大穴牟遲神の兄神たちは八上比売（ヤガミヒメ）に夢中であった。しかし、八上比売は兄神たちを振って、大穴牟遲神を選んだ。これに怒った兄神たちは大穴牟遲神を殺そうとする。先ず、兄神たちは、伯耆の手間山で焼けた大石を落とした。大穴牟遲神はこれに当たって死亡したが、蜃貝比売と蛤貝比売の治療によって蘇生した。この場面の原文は次の通りである。

爾蜃貝比賣、岐佐宜_{此三字以御}集而、蛤貝比賣、待承而、塗母乳汁者、成麗壯夫_{君壯夫云袁等古}而出遊行

上述したように、古事記を真に理解するためには、一字一句の意味を繋いで一つの文として読む必要がある。「岐」には「分れ道」、「佐」には「たすけ（力を貸して危険な状態から逃れさせること）」、「宜」には「健康だ」、「集」には「整える」の意味があるから、「爾蜃貝比賣、岐佐宜_{此三字以御}集而」は「蜃貝比売は無事に逃げる道を準備した」の意味である。また、「待」には「防ぐ」、「承」にも「防ぐ」、「而」には「のみ」の意味があるから、「蛤貝比賣、待承而」は「蛤貝比売は、ひたすら敵の攻撃を防いだ」の意味である。また、「塗」には「まみえる」、「母」には「雌しべがつく植物」、「乳」には「植物の葉や茎から出る白い液」、「汁」には「涙」の意味があるから、「塗母乳汁者」は「草まみれ涙まみれになった人」の意味であろう。さらに、「成」には「たいらげる（反抗する者や敵を討ち、争いのない世の中にする）」、「出」には「離れる」、「遊」には「家を離れて故郷でない地に行く」、「行」にも「離れる」の意味があるから、「成麗壯夫而出遊行」は「このようにして敵を討った大穴牟遲神はどこかへ立ち去った」の意味であると考えられる。従って、この部分の文章は、

〈蜃貝比売は無事に逃げる道を準備し、蛤貝比売はひたすらに兄神軍の攻撃を防ぎ、大

穴牟遲は草まみれ涙まみれになって戦い、敵を討ち果たして何処かに立ち去った。と訳される。このように神話では大穴牟遲神は被害者であるが、実は兄の一人を倒して伯耆国の支配者になったと考えられる。

神話は続く。これを見た八十神は、大木を切り倒して楔を打ち込んで開いたところに大穴牟智を入れ、楔を引き抜いて大穴牟遲を木に挟んで殺した。御祖命は大穴牟遲神を探しだし、その木を折って蘇生させた。この蘇生させた部分の原文は次の通りである。

爾亦其御祖命、哭乍求者、得見、即折其木取出活

筆者は、「楔を打ち込んで開いた木」は兄神の軍であると考え。また、「折」には「くじく、勢いを弱らせる」、「取」には「手に入れる」、「出」には「移動を始める」、「活」には「生きる」の意味があるから、この文は、

〈先祖霊（御祖命）は泣きながら、大穴牟遲神を探した。そして、大穴牟遲が兄神を破り、生きて動き廻っているのを見た。〉

と現代語に訳される。大穴牟遲神は、2人目の兄を殺したのである。

神話は続く。御祖命は大穴牟遲神を木の国の大屋毘古神の所に避難させたが、武装した兄神たちが大穴牟遲神を渡せと要求してきた。そこで大屋毘古神は木の俣から大穴牟遲神を逃がし、根の堅洲国の須佐之男命のもとに行くように言った。大穴牟遲神は、地下の霊の世界に入ったのである。須佐之男命は大穴牟遲神に蛇の部屋に寝るように命じたが、大穴牟遲神は、須勢理毘売に貰った比禮で蛇を静かにさせることができた。この説話の冒頭の原文は、

即喚入而 令寝其蛇室

である。古事記の現代語訳本では、「即」を「すぐに」と訳している。しかし、「即」には「追う」の意味もあり、「而」は接続の助字であるので、

〈兄神が大声を出して追って来たので、大穴牟遲神はその男（兄神）を蛇の部屋に寝させた。〉

とも訳することも出来る。兄神は比禮を持っていなかったなので、蛇に噛まれたであろう。大穴牟遲神は3人目の兄を殺したと考えられる。

次に、須佐之男命は大穴牟遲神を百足と蜂の部屋に入れたが、大穴牟遲神は百足と蜂用の比禮を用いてこれを静かにさせた。この説話の冒頭の原文は次の通りである。

亦來日夜者 入吳公與蜂室

「者」には「時を示す言葉そえる文字」のいみがあるから、訳本では「亦來日夜者」を「亦来る日の夜」と読んで「次の日」としてあるとしている。しかし、「者」を人間と解釈すれば、この文は、

〈(大穴牟遲神は) 日夜、攻撃して来る兄神を百足と蛇の部屋に入れた。〉

と訳することが出来る。兄神は比禮を持っていなかったなので、百足や蜂に刺されたであろう。大穴牟遲神は4人目の兄を殺したと考えられる。

次に、須佐之男命は鎗矢を野原に射て、大穴牟遲神に鎗矢を取りに行かせてから野原に火をつけた。絶体絶命のピンチであったが、鼠が「中はホラホラ、外はズブズブ」と言ったの

でその場を踏みしめると、大穴牟遲は空洞に落ちて火を逃れることができた。火が消えると、鼠が、鼠の子どもが囓ってボロボロになった鏑矢を加えて出て来た。「中はホラホラ、外はズブズブ」の原文は「内者富良富良 外者須夫須夫」である。「富」には「満ち足りている」、「良」には「やすらか」、「須」には「待ち構える」、「夫」には「兵士」の意味があるから、「内者富良富良 外者須夫須夫」は、「この中にいれば安全だけど、外には大勢の兵士が待ちかねている」の意味である。つまり、大穴牟遲神は戦争をしていたのであり、鏑矢は兄神であり、鼠たちは大穴牟遲神軍の兵士であると考えられる。鏑矢は子鼠たちに囓られてボロボロになったのであるから、大穴牟遲神軍の兵士が最後の兄神を殺したものと考えられる。これらの3人の兄を殺して、大穴牟遲神は出雲を支配するようになったと推察される。

神話は続く。大穴牟遲は須勢理毘売を背負い、須佐之男命の生大刀と生弓矢と天の詔琴を盗んで黄泉の国を脱出し、国作りを始めた。そこに約束通りに結婚した八上比売がやって来る。この部分の原を下に記す。

故、其八上比賣、如先期、美刀阿多波志都。此七字以音。故、其八上比賣者、雖率來。美刀阿多波志都は「みとあわたす」と読み、「あたわす」は「交合する。結婚する。」の意味である。しかし、「美」には「褒める」、「阿」は「おもねる」、「波」は「波のように動く」の意味で、転じて「軍隊」の意味であると考えられるから、この七字は「出雲の都を目指す大軍の名誉ある刀」意味である。また、「雖」には「ただ」、「率」には「後ろについて」の意味がある。従って、この原文を現代語に訳すと、

〈八上比売は都に凱旋する大穴牟遲神軍の名誉ある刀になって、ただ後ろからについてきた。〉

‘であり、結婚とは趣が違う。そこで、八上比売が八十神のプロポーズを断って大穴牟遲神と結婚することを宣言する場面を振り返ると、その原文は、

吾者、不聞汝等之言。将嫁大穴牟遲神。

であり、八上比売は「大穴牟遲神と結婚します」と言ったと解釈されている。しかし、「嫁」には「行く」の意味があるから、この文章の現代語訳は、

〈私は、貴方たちの言うことは聞きません。今から、大穴牟遲神と出かけます。〉

と言ったとも解釈される。その八上比売は、大穴牟遲神の正妻である須勢理毘売の嫉妬に怯えて、生まれた子を木の俣に挟んで返ってしまう。「帰る」は「元いた場所に戻る」の意味であるが、「返る」は「物や状態が元の持ち主や本来あるべき状態に戻る」の意味であるから、八上比売は故郷に帰ったのではなく、元の状態に戻ったのである。これらのことは、八上比売は大穴牟遲と結婚したのではなく、殺されて、霊となって大穴牟遲神についてきたことを示す。八上比売が木の俣に挟んだ子どもの名前は木俣神で、別名は御井神である。「御」には「すべる（全体をまとめて支配する）」、「井」には「おきて（きまり）」の意味があるから、御井神は根の国（使者の国）の番人であると考えられる。大穴牟遲神が木の俣を抜けて根の国に入るには大屋毘古神の力が必要であった。従って、根の国から木の俣を取って出るには木俣神（御井神）の力が必要であったのであろう。元を正せば、大穴牟遲は木の俣に挟

まれたことが原因となって根の国に来ることになった。従って、八上比売は、大穴牟遲神が木の俣に挟まれた事件で死去したものと推察される。八上は因幡国八上郡（現在の鳥取市の南部）のことであると思われる。従って、大穴牟遲神は2人目の兄を殺して因幡国の支配者になったと考えられる。

神話は続く。根の国を出た大穴牟遲神は高志国に行き、沼河比売にプロポーズするが、沼河比売はこれを拒絶する。大国主神はたくさん名前を持っているが、この時の名は八千矛神（ヤチホコノカミ）である。これは矛を沢山持っている神という意味であるから、何故、プロポーズするために武装をする必要があったのかと疑問が湧く。神話では、八千矛神は次のように歌って沼河比売にプロポーズした。

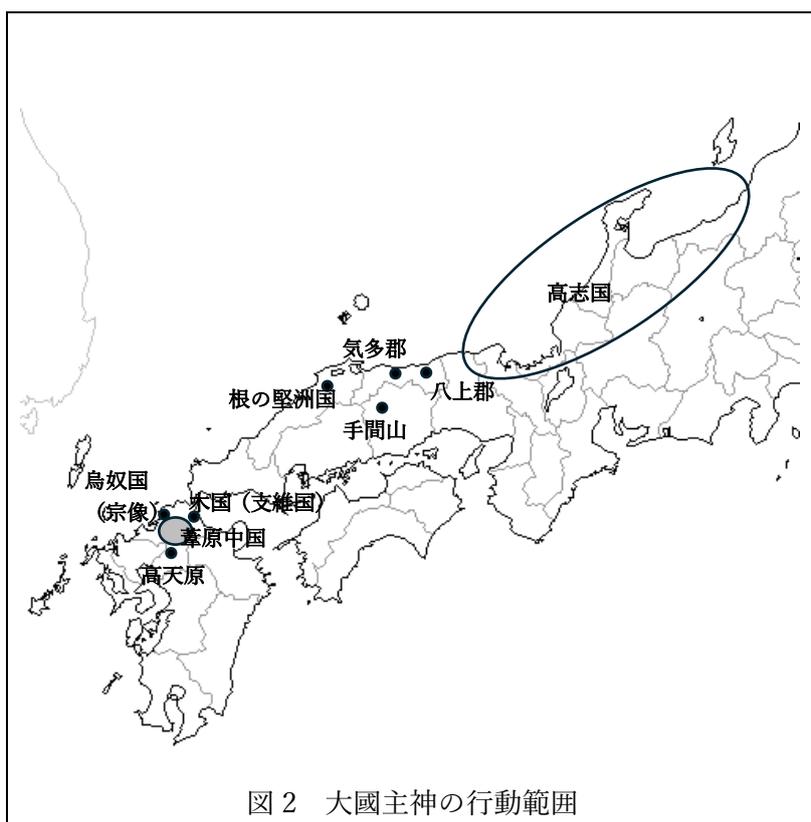
夜知富許能 迦微能美許登波 夜斯麻久爾 都麻麻岐迦泥弓 登富登富斯 故志能久
爾 佐加志賣遠 阿理登岐加志弓 久波志賣遠 阿理伎許志弓 佐用婆比爾 阿理多
多斯 用婆比爾 阿理加用婆勢 多知賀遠母 伊麻陀登加受弓 淤須比遠母 伊麻陀
登加泥婆 遠登賣能 那須夜伊多斗遠 淤曾夫良比 和何多多勢禮婆 比許豆良比
和和何多多勢禮婆 阿遠夜麻爾 奴延波那伎奴 佐怒都登理 岐藝斯波登與牟 爾波
都登理 迦祁波那久 宇禮多久母 那久那留登理加 許能登理母 宇知夜米許世泥
伊斯多布夜 阿麻波勢豆加比 許登能 加多理其登母 許遠婆

「夜知富許能」は「八千矛の」、「迦微能美許登波」は「神の命は」と読める。このように、万葉仮名として読めば、この歌はラブソングになる。しかし、一字一句の意味を繋ぐと、この文章は次のように訳される。

〈夜、この国は豊かであることを知り、力があることが判った。少し才能がある人に出会い、完成した軍があることが判った。夜に麻を攻めると、麻が集まって穢れた弓を射かけてきて、作った富を少しずつ捨てている。ゆえに、いつまでも麻でいたいのであれば、私は、その富を他人に売ることが勧められる。道理に従って、戦いを止めよ。戦いを休止して富を他人に売ることが考えよ。正しい判断をして弓を捨てるなら、婆さんを仲間として使ってやろう。人がたくさん殺されていいなら、婆さんが全部やれ。婆さんの軍隊をもっと働かせても、我兵の母を喜ばすだけだ。麻が年老いて汚い婆さんであったら、富を売る能力を高められない。何故、よそ者が大勢集まる夜を待たないのか。その夥しい数の兵士を私の仲間にするならば、みんなが婆さんを敬うようにしよう。その仲間が子どもを仲間にするならば、大勢が婆さんを敬うことにしよう。夜に麻が近くにいないなら、身分の低い人を上手く使って軍が動くのを止めるべきだ。怒っている都の人達が理性的になるようにしろ。おきてを捨て、軍を壊し、仲間になれ。そのようにすれば、都は落ち着く。強力な軍が攻めてきたら、お前の都は長続きしない。母親たちを敬うこと考えろ。ぐずぐずするな。早くしろ。正しい方向に動け。役人たちが正しいことをするのを認めろ。夜に米を扱うのはこの世を汚すことだと知れ。夜の中に多数を切り裂いてやる。麻に頼っても、子どもが攻めてくるようなものだ。才能がある人を引き上げることを認めろ。〉

大穴牟遲神は沼河比売にプロポーズしたのではなく、高志国を攻撃して降伏を迫ったのである。「麻」の意味は不明であるが、宗教指導者のような存在ではないかと考えられる。大穴牟遲神は高志国を征服して、日本海側一帯の大国を支配する王になったと考えられる。このため、これからは大穴牟遲神ではなく、大国主神と称されるようになる。

古事記で大国主神が登場する地名はすべて日本海に面している（図 2）。大穴牟遲神が白兔を救けた気多は現在の鳥取市付近であり、和名類聚抄にも稲葉国気多郡の名がある。八上比売は、因幡国八上郡（鳥取市の南部から現在の八頭郡の一带）の人であると考えられる。鳥取県西伯郡南部町に手間山があり、ここが古事記の「伯岐国の手間山」に比定されている。また、『根の国』は『黄泉の国』と同じ意味で、島根県にあった。現在、斐伊川は宍道湖に流れ込んでいるが、弥生時代には直接日本海に注いでいた。斐伊川の河口はデルタ地帯で、何本もの川に別れて州になっていた。この洲にあった国が『根の堅洲国』であり、現在の出雲市であると考えられる。また、高志国は越国（現在の福井県から新潟県の範囲）のことである。また、筆者は前報¹⁾で、伊邪那美神が生んだ木の神は豊前地方の行橋市付近にあった支惟国王であると考えられることを示した。大穴牟遲神が大屋毘古神を頼って逃げこんだ



また、白兔がワニに騙したと告げる部分の原文は「我見欺」であるが、「見」には「理解する」の意味があるから、この文は「私は海を侮っていたことに気づいた」と訳すべきである。船長（素戔）は難破して気多海岸に漂着したところを、大穴牟遲神に助けられたものと考え

られる。大穴牟遲神は船団を率いる人物を味方に付けことから、日本海の制海権を握り、出雲から高志国までの広い範囲を支配できたと考えられる。

高志国を征服した大国主神は倭国に向かおうとする。この部分の原文を下に示す。

故其日子遲神、和備弓三字以音、自出雲將上坐倭国而

「和備弓」は意味不明であるが、この文の前に「須勢理毘売命はとても嫉妬深い女神であった」と書かれている。従って、現代語訳本には次のように書かれている。

〈八千矛神は当惑してしまい、出雲から倭国へと移動しようと、旅支度をした。〉

しかし、「和備弓」を「当惑して」と解釈するのは少し無理があるように思われる。「和」には「整える」、「備」には「防備」の意味があるから、「和備弓」は「防備と攻撃を整える」の意味である。また、「日」には「天皇のことに關して言う言葉」、「遲」には「願う、望む」の意味があるから「其日子遲神」は「天子になりたいと思った神」の意味であり、大穴牟遲神のことであると考えられる。さらに、「坐」には「行く」の意味があるから、この文は次のように訳される。

〈大穴牟遲神は戦争の準備を整えて、出雲から倭国に行こうとした。〉

その大国主神は出発する間に須勢理毘売歌に歌を贈った。これに対して、須勢理毘売命は下記の歌を返した。

夜知富許能 加微能美許登夜 阿賀淤富久邇奴斯 那許曾波 遠邇伊麻世婆 宇知微
流 斯麻能佐岐耶岐 加岐微流 伊蘇能佐岐淤知受 和加久佐能 都麻母多勢良米
阿波母與 賣邇斯阿禮婆 那遠岐弓 遠波那志 那遠伎弓 都麻波那斯 阿夜加岐能
布波夜賀斯多爾 牟斯夫須麻 爾古夜賀斯多爾 多玖夫須麻 佐夜具賀斯多爾 阿和
由岐能 和加夜流牟泥遠 多玖豆怒能 斯路岐多陀牟岐 曾陀多岐 多多岐麻那賀理
麻多麻傳 多麻傳佐斯麻岐 毛毛那賀邇 伊遠斯那世 登與美岐 多弓麻都良世

この歌は夫婦愛の歌と考えられている。しかし、その一字一句の意味を繋ぐと、下に示すように全く違う意味の文章になる。

〈夜は豊かさを寛らせ、才能を目立たせる。軍事力に少し頭を使えば充実した夜になる。富を狙って近づく奴を殺せ。何故、他国の軍が来るのを許すのか。この王がこの婆から去る時が近づいている。同類が衰退していることを強く感じる。この国の王の仕事を止め、私欲を捨てて助けに行け。衰退した同類の仲間になれ。同類を助け、智恵を授けて才能を蘇らせろ。この国の王は兵士を多く持っているし、米も豊富にある。母の言う通りに軍を率いる。敵に出逢ったらこの婆の爲に、斬れ。何故、弓を手にとって行かないのだ。遠征軍は何故に志をもたないのだ。弓を手にとって行け。王の軍は何故に切り裂かないのか。夜の攻撃を多くしろ。夜に軍を起こせば多くを切り裂くことができる。兵をたくさん切り裂けば、王の助けになる。昔は夜に大きな戦果を上げて祝ったものだ。経験豊かな兵が多いと王は助かる。夜戦の準備をしておけば敵兵を多数切り裂くことができる。軍事力に基づいた和平を行え。同類が泥を貪りながら死んで行く時に和平を行ったら、多くの人々は軍を批判するであろう。条理を壊し、様々な筋道を考えろ。他

の選択肢を増やせ。選択肢が多いことが王にとっては条理なのだ。王が褒めれば王の意思は部下に伝わる。王が多くに伝えれば、敵の王を切り裂く助けになる。何故、植物の毛がくっつくのを喜ばないのか。他族がこの世を壊すなら、別の王にくみして進め。大勢の弓手をもった王が都を素晴らしい世の中にする。〉

須勢理毘売命の歌は夫婦愛の歌ではなく、大国主神が倭国に行って同類の爲に戦うことを鼓舞するものである。さらに、この歌の後には、

如此歌、即爲宇伎由比四字以音而、宇那賀氣理弓六字以音、至今鎮座也。此謂之神語也と書かれている。現代語訳本には、この文章は次のように書かれている。

〈歌をうたうとすぐに盃を交わし、夫婦の契りを交わして互いに腕を首に掛けて、仲睦まじく鎮座しています。これは神語りといいます。〉

と訳されている。しかし、「宇」には「何事かを成し遂げようとする強い気持ち」、「伎」には「能力」、「由」には「依る」、「比」には「同類」の意味があるので、「宇伎由比」は、「同類のために腕前を發揮しようとした」との意味になる。また、「那」は疑問・反語の助詞であり、「賀」には「喜ぶ」、「理」には「ことわり（物事がそうなった、またはそのように判断した訳）」の意味があり、「弓」は「弓を手にする」の意味であると思われるので、「宇那賀氣理弓」は「喜んで弓を取って戦おうと決断しないのか。」の意味である。

このように、古事記の編纂者は、大国主神は平和的で優しい男性として神話化する一方で、巧みな筆法によって裏では密かに荒々しい男であることを伝えている。このことは、大国主神は実在する人物であることを示唆する。

248年頃、大国主神は邪馬台国と戦うために九州に渡ったと考えられる。その頃、狗奴国王が滅亡したため、須佐之男命の娘の三女神（多岐理比売命、市寸島比売命および多岐都比売命）は宗像の鳥奴国に逃れたと考えられる。大国主神は多紀理比売と結婚して須佐之男命の後継者の地位を固め、邪馬台国と戦争を始めた。これが、大国主神の国作りであり、邪馬台国側から見れば国譲りにむけての戦いである。

3-3 国譲りと国作り

古事記の舞台は高天原に戻る。天照大御神の長男は正勝吾勝勝速日天忍穗耳命（マサカツアカツカツハヤヒアメノオシホミニノミコト）である。「正勝吾勝勝」を直訳すると「正に勝った。吾は勝った。」の意味であるから、天忍穗耳命は須佐之男命（狗奴国）の軍を打ち破り、葦原中国を手に入れたものと考えられる。248年頃、天忍穗耳命はその葦原中国の経営に着手した。ところが、大国主神が攻めてきて、再び戦争になった。古事記には、天忍穗耳命は「葦原の中国は騒がしい」と言って還り昇ってきたと記されている。「還る」とは元に戻るという意味であるが、「土に還る」という様に抽象的な意味がある。また、「忍」は「耐え忍ぶ」、「穂」は「槍の先の部分」の意味であるので、天忍穗耳命は「槍の穂先が刺さったのを耐え忍んだ人」の意味である。これらのことは、天忍穗耳命は葦原の中国で戦死したことを示す。

天忍穗耳の妻は高御産巢日神の娘の萬幡豊秋津師比売命（ヨロズハタトヨアキツシヒメノミコト）である。「萬」は「数が非常に多いこと」、「幡」は「のぼり」あるいは「ひるがえる」、「豊」は「豊の国（葦原の中国）」、「秋」は「穀物が実る」、「津」は「人が多く集まる」、「師」は「多くの人を統率する主君」の意味であるから、「萬幡豊秋津師比売」は「葦原の中国に沢山の幟をひるがえし、実り多く、人が沢山集まる処にした女王」の意味である。つまり、萬幡豊秋津師比売命は葦原中国を平定したのである。従って、天忍穗耳命が卑弥呼の後を継いだ男王で、萬幡豊秋津師比売命が台与で、高御産巢日神が卑弥呼の政治を助けた男弟であると考えられる。

萬幡豊秋津師比売命（台与）は、天菩比神（アメノホヒノカミ）を葦原之中国に派遣して大国主神と戦わせた。しかし、天菩比命は3年たっても戦果を上げることができなかったので、萬幡豊秋津師比売命と高御産巢日神は天菩比神に代えて天若日子（アメノワカヒコ）を派遣して、葦原の中国の平定に当たさせた。しかし、8年後に、天若日子は大国主神の娘の下照比売（シタテルヒメ）と結婚して、葦原の中国を自分のものにしようと企んだことが判った。このため、高御産巢日神は刺客を送って天若日子を殺したとされる。若日子は若い男の意味であって、特定の神の名前ではない。天若日子の父は天津国玉（アマツクニタマ）であるが、これは「天つ神の大地の魂を司る神」の意味であり、特定の神を指すものではない。従って、天若日子と天津国魂神は、天津神（邪馬台国）を裏切った者の素性を隠すために用いられた代名詞であると考えられる。

古事記によれば、下照比売の兄の阿遲志貴高日子根命（アヂスキタカヒコネノミコト）は天若日子にそっくりであった。このため、天若日子の父の天津国魂神は、葬式にやって来た阿遲志貴高日子根命を見て「私の子は生きている」と喜び、これに怒った阿遲志貴高日子根命は喪屋を蹴飛ばして飛び去った。その時、天若日子の妻の下照比売命は、下記の歌を歌った。

阿米那流夜 淤登多那婆多能 宇那賀世流 多麻能美須麻流 美須麻流邇 阿那陀麻
波夜 美多邇 布多和多良須 阿治志貴多迦 比古泥能迦微曾也

訳本には、この歌は下記の読み下し文として記述されている。

〈天なるや 弟棚機の 頂きがせる 玉の御統 御統に 穴玉はや み谷二（ふた）渡
らす 阿遲志貴高日子根命ぞ〉

筆者は、これを次のように解釈する。

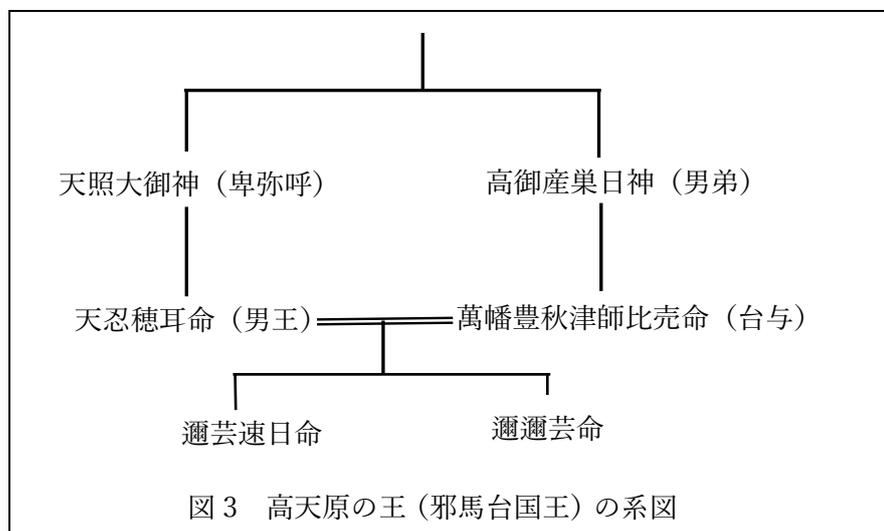
〈天上の機織女が首にかけている首飾りの管玉を山に、管玉と管玉の間を谷に例え
ると、この管玉を飛び立った阿遲志貴高日子根神は二つ谷を渡った管玉に降り立ちま
した。〉

天若日子と阿遲志貴高日子根命の間には、もう一つの管玉がある。従って、この歌は、天若日子の名を騙る謎の人物がいて、この人物は死ななかつたことを示唆している。実は、この歌（原文）には別の意味がある。「阿」には「おもねる」、「那」には「なぜ、どうして」、「流」には「時がたつ」の意味があるので、「阿米那流夜」は「食うために、どうして時がたつま

まにしているのか」の意味であると考えられる。また、「淤」には「ふさがる」、「登」には「引き上げる」、「多」には「数や量がたくさんある」、「那」には「なぜ、どうして」、「能」には「働き」のいみがあるから、「淤登多那婆多能」は「上が詰まっているのに、どうして婆さんがいつまでも統治しているのか」の意味であると考えられる。このようにして、この原文を解析すると、その意味は次のようになる。

〈食うためのとはいえ、何故、時の流れに身を任せているのか。上が詰まっているのに、何で婆さんがいつまでも統治しているのか。何故、世代交代することを喜ばないのかと強く思う。王の能力や見た目を増すためには、王が代る必要がある。見た目では、王を代える時期が近づいている。王の軍を破り、多くの素晴らしいことを実現しろ。穏やかさや希望を世に広めろ。政治によって尊い者が多く集まるように志せ。昔の汚れた政治よりも少しでも良くしよう。〉

この歌は、天若日子は下照比売にそそのかされて、萬幡豊秋津師比売命（台与）を裏切ったことを示す。その天若日子は天孫の印しである天之波波矢（アメノハハヤ）を渡されたが、日本書紀によれば神武天皇より先に大和を支配していた邇芸速日命（ニギハヤヒノミコト＝日本書紀では饒速日命）も天之波波矢を持っていた。9世紀に成立した先代旧辞本紀によれば、邇芸速日命は天忍穗耳命の子である。従って、天若日子は天孫の邇芸速日命であって、葦原の中国で殺されたのではなく、大和に逃亡したと考えられる。



国譲りは、大国主神側から見た場合には「国作り」であり、邪馬台国と狗奴国による葦原の中国の領有権をかけた戦いであった。古事記によれば、大国主神の国作りを手伝った小名毘古那神（スクナヒコナノカミ）は、天の羅摩船（ガガイモの船）に乗り、蛾の皮を剥いて作った服を着ていた。しかし、このような小さい人はいないので、「小さい」とは比喩表現であるに違いない。恐らく、小名毘古那神は体が小さかったのではなく、年齢が小さかった、つまり若かったものと考えられる。実際、「小」には「年齢が少ない」、「名」に

は「名声」の意味があるから、小名毘古那神は「若いながらも名声がある方」の意味である。従って、この神は「ガガイモの船」に乗っていなかったし、「蛾の皮を内剥ぎに剥いで作った服」を着てはいなかった。「天」は、この神が高天原の出身であることを示す。また、「羅」には「連なる、網の目のように並べる」、「摩」には「削る」の意味があるから、「羅摩船」は「網の目のように並べた物から削り取った一部」の意味である。また、古事記原文では、小名毘古那神は「蛾」ではなく「鵝」の皮を内剥ぎに剥いで作った服を着ていた」とある。「鵝」は「ガチョウ」である。ガチョウは非常に攻撃的な鳥であるから、この場合のガチョウは軍のことでありと考えられる。従って、「天の羅摩船に乗って帰って来た、鵝の皮を内剥ぎに剥いで作った服を着ていた神」とは「高天原（邪馬台国）軍を率いたが、軍を離れた人」の意味であると考えられる。そして、この神は常世の国（海の彼方）に行ってしまったのである。このような人物に該当するのは天若日子（邇芸速日命）のみである。大和朝廷にとって、天孫の邇芸速日命が天照大御神を裏切ったという事件は隠さなければならない事件であったに違いない。このため、邇芸速日命（饒速日命）の代わりに、天若日子や小名毘古那神の名を用いたと考えられる。邇芸速日命が高天原（邪馬台国）を裏切った事実を隠さなければならなかったということは、この神話が史実に基づくものであるからに他ならない。

国譲りの神話の最後の場面では、建御雷神（タケミカヅチノカミ）と天鳥船神（アメノトリフネノカミ）が出雲の稲佐の浜に降り立ち、大国主神に国を譲るように要求する。この説話と、出雲の多芸志浜に大国主神の神殿を建てたとの説話があることが、葦原の中国は出雲であるとの誤解が生じた原因である。しかし、天鳥船神が登場するのはこの時のみであることは、これまでの説話の舞台は出雲ではないこと示す。大国主神は葦原の中国（筑豊）での戦いに敗れて本拠地の出雲に逃げ帰ったから、邪馬台国は船で大国主神を追撃したのである。古事記によれば、国譲りを迫られた大国主神は、事代主神（コトシロヌシノカミ）と建御名方神（タケミナカタノカミ）の二人の息子に聞いてくれと答えた。「事」には「政治」の意味があるから、「事代主神」は「大国主神に代わって（出雲の）政治を行った人」の意味である。また、「御」には「統べる」、「名」には「優れている」、「方」には「並んだ船」の意味があるから、「建御名方神」は「水軍を率いた人」であると考えられる。高天原軍を率いる建御雷神は先ず事代主神を攻撃した。国譲りを要求された事代主神はあっさりと国を譲ることを承諾し、「船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して、隠れき。」と書かれている。この部分は、「事代主神は船を青芝垣に変えて、そこに籠もった。」と訳されている。しかし、「打ち成す」は「戦って敵の数を少なくする」の意味である。また、「手」には「人」の意味があるから、「天の逆手」は「天津神に逆らう人たち」の意味であろう。また、「柴垣」は、神社や聖域の周囲にめぐらされた「玉垣」の原型であるから、「青玉垣」は「事代主神の宮」であると考えられる。従って、この文節は、「建御雷神は（事代主神の）船を踏み傾け、逆らう人たちを責め滅らしたので、事代主神は自分の宮で死んだ。」の意味であると考えられる。つまり、事代主神は自ら国を譲ったのではなく、邪馬台国に攻め滅ぼされ

たと考えられる。

建御名方神は建御雷神に力競べを挑んだが投げ飛ばされて逃げ出し、科野国の州羽（諏訪）に逃げたとされる。このようにして、260年頃、大国主神が治める出雲国は滅亡したと考えられる。安本によれば、荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡に青銅器が埋納されたのは260年頃である。

4. まとめ

天照大御神は邪馬台国の女王の卑弥呼であり、須佐之男命は狗奴国王の卑弥弓呼である。高天原は邪馬台国の都であり、現在の福岡県朝倉市甘木であった。また、筑豊地方が豊葦原の中国であった。247年、狗奴国が邪馬台国の都（高天原）に攻め上がり、卑弥呼（天照大御神）を殺して高天原を占領した。邪馬台国は帯方郡から派遣された張政らの支援を得て反撃した。高天原における天照大御神と須佐之男命の神話はこのことを基にして創られたと考えられた。このことを基にして天照大御神を天岩戸から出すために祭りを行った説話が創られ、思兼神は張政であり、思兼神が鳴かせた外国の長鳴き鳥は帯方郡から派遣されてきた国境警備隊であると考えられた。宇気比は占いではなく、誓約（セイヤク）であると考えられた。この戦いの後、両国は永代に渡って、天孫を王とし、須佐之男命の後裔の女性を王妃とする国を作ることを誓約したと考えられた。

時代は遡って、邪馬台国が倭国の大乱に勝利して筑紫と肥を統一した頃、狗奴国は九州東北部を統一して、両国は対立するようになった。狗奴国王の卑弥弓呼（須佐之男命）は邪馬台国と戦うために鉄製の武器を必要としたが、朝鮮から入手できなかった。このため奥出雲の野たたら製鉄に目を付け、200年頃、出雲を征服し、出雲の鉄を独占するようになった。そして、この鉄を基に武器を作り、邪馬台国と戦ったと考えられた。

須佐之男命は出雲で鉄を入手する手順を決めると、狗奴国に帰った。古事記の大国主神の条の神話は、須佐之男命が去った後の、220年頃から出雲で起った事件を基にして創られたと考えられた。神話では、大国主神は平和的で非常に優しい人物である。しかし、古事記の編纂者は巧みな筆法により、大国主神は5人の異母兄を殺して出雲、伯耆、因幡を統一し、さらには高志国を滅ぼして、本州の日本海側を支配する大王（大国主神）になったと記述していた。また、因幡の白兔は実は船長であり、大国主神は船長を味方につけたために大王になったと考えられた。

邪馬台国では天照大御神の子の天忍穗耳命が王となり、248年頃、狗奴国を滅ぼして葦原中国に遷って統治を始めた。しかし、大国主神が攻めてきたため、天忍穗耳命は戦死し、再び戦争になった。邪馬台国では、天忍穗耳命の妻の萬幡豊秋津師比売命（台与）が女王になり、義理の弟の天菩日神を葦原中国に派遣して大国主神と戦わせた。しかし、天菩日神は戦果を上げることができなかったので、萬幡豊秋津師比売命は息子の邇芸速日命を派遣して葦原中国の平定に当たさせた。ところが、259年頃、邇芸速日命は大国主神の娘の下照比売命と結婚して大国主神側に寝返ったことが判った。このため萬幡豊秋津師比売命は邇芸速

日命の追討軍を差し向けたが、邇芸速日命は畿内に逃亡した。

大国主神は出雲に逃げ帰った。しかし、最後の望みの綱であった事代主神も、建御名方神も、邪馬台国軍に敗れたため、260年頃、大国主神が治める出雲国は滅亡したと考えられた。

参考文献

- 1) 大川直士 記紀を読む(1) 一創世編一 (2025)
- 2) 大川直士 邪馬台国の実情 古代史ネットワーク (2024)
- 3) 大川直士 倭の30国 古代史ネットワーク (2025)
- 4) 安本美典 邪馬台国への道 徳間書店(1990)
- 5) 倉本一宏 持統天皇と皇位継承 吉川弘文館(2009)
- 6) 石野博信・高島忠平・武末純一・常松幹雄・寺澤薫・村上恭道・森岡秀人・柳田康男・山尾幸久 邪馬台国時代のツクシとヤマト 学生社(2006)
- 7) 安本美典 衝撃の古代出雲 産能大学出版部(1997)
- 8) 長野正孝 古代史の謎は「海路」で解ける PHP新書(2015)
- 9) 森浩一 日本史津々浦々 小学館ライブラリー(1997)